

# 「<sup>がくしゅう</sup>楽習」

## 主体的な遊びを通して 子どもは伸びる

長年、教育の現場で

多くの子どもたちとふれあい、

数々の調査研究を行われてきた内田先生。

今、日本の子どもたちに必要なものは、

「楽習」であるとお話ししてくださいました。

耳慣れない、この言葉。

いったい、どのようなものなのでしょう？



お話を聞きしたのは

内田伸子先生

十文字女子大学理事。同大学特任教授。お茶の水女子大学名誉教授。発達心理学、認知心理学、保育学を専門とする。著書に「お母さん知っていますか？子どもの「つまづき」には理由がある！」(PHP叢書)など多数。

子どもの学びにおいて、何よりも大切なこと。それは、主体性をもたせることだと話す内田伸子先生。

「主体性などというと、少し難しく感じるかもしれませんが、言い換えれば、重要なのは「playful learning」の姿勢なんです。日本語に訳せば、楽習です。日本語の中で、たくさん経験をさせること。それが、子どもの成長にはとても重要なんです。私は常々、大人が無理強いするのではなく、子ども自身が「やりたい！」と思うような環境を整えてあげてほしいとお話しています。みなさんも、自分のお子さんには積極的に生き生きと、たくさんすることにチャレンジしてほしいと考えていらっしゃるのでしょうか？ そんな人間に育つために大切なのが、まさに「楽習」なんです。」

とはいえ、周りがお勉強の教室に通い出したり、スポーツ系の習い事をはじめたりなどの話を聞くと、「うちの子だけ、後れをとってしまうんじゃないかしら」と、焦ってしまうのも事実。子どもの好きなように、ただ遊ばせているだけなんて、何だか不安になってしまいます。

「まあ、その気持ちもわからないではないですが、それはその時だけなので、できないにすぎないのではないかしら」。子どものやる気を引き出し、たくさん経験をさせる「楽習」。実は成長するにつれて、力を発揮してくるのだと内田先生は言います。

「国際的に実施されている、生徒の学習到達度を調べる、『PISA調査』というものがあります。少し前に、「フィンランドの算数の成績がとても優秀」なんて話を聞いたことがありませんか？ それが、このPISA調査なんです。実は、日本は、算数の成績が、中国、韓国に差をつけられて、参加しているアジア諸国の中では最下位でした。算数に対する意欲が、日本の子どもはとても低い。ちなみに文部科学省で行っている全国の小6、中3を対象にした学力テストでも、算数に関しては暗記的な問題だと平均80点は取れているのに、得た知識を応用して答えるような、自分で掘り下げていかないと解けない問題になると、正答率の平均がいきなり20点台に落ちてしまうんです。これ、どういうことを意味

しているかわかりますか？ 日本の子どもは、与えられたものに関しては機械的に対応することができると、自分で意欲をもって取り組まなければいけない問題になってしまうと、一気に問題解決能力が下がってしまふということ。日本の子どもたちは、受け身の姿勢になってしまっているという実態が顕著になっているのです。

与えられるものを、ただこなすだけになりがちで、今の日本の子どもたち。より積極的な姿勢にするには、どうしたらいいのでしょうか？

「子どもたちが、『やってみたい！』と思うようなことができるだけたくさんさせてあげればいいのです。小さいうちに、多くの楽しい経験をさせてあげればいいんです。そうすれば、もし知らないことに向き合ったときにも、物怖じせずに『何だろう？ やってみよう！』と意欲につながる。『知らないことを知るの、楽しいんだ』と経験的に知っている子は、生きていく上でとても強いですよ。ところで、子どもたちがしたいこと、大好きなことって、何だと思えますか？……そう、遊びですよね。やっていて自分が、めいっぱい楽しい

何よりも、子どもに寄り添うことを第一に考えます。対して、強制型しつけは一方的に親の言うことを聞かせようとするトップダウン方式。大人の考える悪いことをしたときには罰を与えるのは当然であるという考えのもとでしつけがなされます。語彙力の高い子どもは、総じて共有型しつけを受けているケースが多かったんですね。例えば、調査の中で、絵本の読み聞かせの様子を観察する項目がありました。共有型しつけのお母さんは、読んだあとに、ひと呼吸おいて子どもの反応をじっくり待っていました。あれこれ大人が言うのではなく、子どもから出てくる言葉を、待ったんですね。子どもから出てきた言葉に、ていねいに否定することなく寄り添おうとする。対して、ある教育熱心な強制型しつけのお母さんは、絵本をばたんと閉じると、『さあ、今のお話はどんなおはなしだった？ 話してごらんさい』と言い出したんです。……これではまったく、子どもは絵本の世界を楽しめませんよね。さらに、強制型しつけを受けたお子さんは、何か行動を起こす前に、すぐに親の顔色を見るんです。そして、親が何か指示を出したり、許可をしないと動き出せない

ことよね。」

知らないことは、こわいことではなく、何かを知るきっかけとなる、とても楽しいことだと経験させること。それは、大きくなってから頭で覚えさせるにはすでに難しく、小さいうちに、体で、経験で実感しなければ、身につかないことなのです。

「だから、その積極性を育てる幼児期の関わりというのは、とても大切なんですね。よい関わり方というのは、ある意味ではとても簡単で、どんなお母さんにもできること。だからこそ、ぜひ取り組んでほしいことなんです。それは、しつけを『共有型』にするということ。たったそれだけのことなんですよ。」

先生が行った数々の調査研究の中には、語彙力によって子どもの発達をはかるものがあります。そこで、高得点をマークした子どもたちには見られた共通点こそが、この『共有型しつけ』だったのです。

「私たちは、しつけを2つのパターンに分けて考えてみました。共有型しつけと強制型しつけです。共有型というのは、親子のふれあいを大切に、子どもと楽しい時間を共に過ごすと考えている親のしつけ法。まず

いでいる。小さいうちから、すでに自主性がなくなってしまうがちなんですね。」

子どもの自主性を、能力を伸ばすために私たち親ができることは、**完全な道すじをつくり、そこに子どもをのせること**ではないと内田先生は考えています。子どもそれぞれの個性や感受性を敏感に見守り、彼らに考える、あるいは選択する余地を常に与えること。あくまで、子どもがそれと気づかない形でサポートすることが、親の役目。

「小さいうちは、やりたいことを好きなだけやらせる。強制ではなく、たくさん選択肢を与えて彼ら自身に選ばせることが大切です。その結果、子どもが自分からやりたいがること、遊ば……やっぱ楽しいこと、遊びなんですよ。たくさん遊ばせて、楽しい経験をたくさんさせる。日本人は勤勉だから、遊び、というと怠けごとと同じように捉えてしまいがち。でも、そうではないんです。楽しいからこそ、印象に残り、しつかりと身につく。楽しいからこそ、将来まで役に立つ**自主性が身につく**。楽習は、小さいうちにこそ身につけたい、親子の大切な習慣なのです。」



〈次号予告〉—楽しく・あそぶ・まなぶ・そだつ—  
“楽習”をキーワードに、次号以降も内田先生からの心あたたまる子育て応援メッセージをお届けします。

